2014・平成26年

復習用書き下し文※音読のためルビと送りがなの歴史的かなづかいは今のかなづかいに変更。

1 原因

江南に竹多し。其の人 筍 を食らふを習ふ。春の時に方たる毎に、苞甲土より出で、頭角繭栗、率ね以て採食に供す。或いは蒸 瀹し て以て湯と為し、茹介茶荈以て 饋きを充たす。

事を好む者目するに清嗜を以てし、方に長ずるを斬らず。

2 結果

故に園林豊美、複垣重扃にして、主人居嘗愛護すと雖も、其の之を食らふに甘しとするに及ぶや、剪伐して顧みず。独り其の味苦くして食品に入らざる者のみ、筍 常に全し。毎に渓谷厳陸の間に当たりて、地に散漫して収められざる者は、必ず苦きにより棄てらるる者なり。而るに甘き者は之を取りて或いは其の類を尽くすに至る。然らば甘き者は自ら戕ふに近し。而るに苦き者は棄てらると雖も、猶ほ剪伐を免るるがごとし。

3 考察

夫れ物類は甘きを尚び、苦き者は全きを得たり。世に貴は取られ賤は棄てられざるは莫し。然れども亦た取らるる者の幸ひならず

して、偶(たまたま)棄てらるる者に幸(さいわ)ひなるを知る。豈(あ)に荘子(そうし)の所謂(いわゆる)無用を以て用と為(な)す者の比(たぐ)ひなるか。

注

1　採食＝地主

2　茹介茶荈充饋

問題文の注5で訳すと「タケノコの穂先の柔らかい皮と茶を食卓にならべる」となり、不自然に思われる。そこで次のように推測して試読した。

充饋＝充飢　（饋＝匱＝欠乏）

茹介＝茹芥　タケノコのうち、通常は食べない部分。※「草茹」はフクロタケというきのこ。タケノコやキノコのような形で土から出た食用植物が「茹」と思われる。芥＝とるに足らない部分。

茶荈＝茶　※茶は早摘み、荈は晩摘みの茶。

復習用現代語訳

1原因

江南地方は竹が多く、そこでは筍を食べる風習がある。春になると、生えたばかりの子牛の角のように、ほんの少し外皮が土から出

る。普通はそれを地主に納める。蒸し煮してスープとし、通常は食べない部分や茶葉を入れて飢えをしのぐ場合もある。

一方、風流人は清らかな竹林をながめるのを好むので、まさに伸びようとする竹の子ども、すなわち筍は切らない。

2 結果

そこで、平素から大事にしている幾重にも垣根や門扉をしつらえた美しい庭園でも、食べてうまい筍だとわかると持ち主は惜しげもなく切ってしまい、まずくて口に入らないものだけがそのまま残る。山の中で採られていない筍が散見されるが、それはまずいので見捨てられた筍である。一方、味のよい筍は取られ、時には取り尽くされる。そうなると、うまいものは自害するに等しく、まずいものは棄てられても切られずにすむようだ。

3 考察

一般に、物においてはおいしいものが尊重され、まずいものはそのままでいることができる。世の常として、価値あるものが取られ、価値の低いものは棄てられる。しかしまた、取られるものが不幸で、たまたま捨てられる者が幸運であることもわかる。もしかしてこれこそ『荘子』の言う『無用ヲ以テ用ト為ス』ことと同じなのだろうか？

※陸樹声『苦竹記』より。官職を辞退することで有名だった彼は、闘争激しい明の政界にあって、高官となりながらも九十七歳まで生き延びた。なお右の「用」は、官吏として「登用（とうよう）」され、「重用（ちょうよう）」されて出世する場合の「用」である。

解説　※44.6は問題文44ページ6行目を示す。

【主張をつかむ】

ステップ1　最初の2行を読む

「江南」の人々は筍（たけのこ）を食べ、あれこれ料理して「食卓にならべる[注5]」

ステップ2　最後の3行を読む

オシリから　読むとわかるよ　お結論m1　により末尾から読もうとするが、末尾が問題になっている。でも、傍線部の「豈（あ）に56」、「所謂（いわゆる）142」「Aを以てBと為す143」は読めるので、次のステップに行く。

ステップ3　最後の問7を見る

「Aを以てBと為す143」により「無用を以て用と為す」と読んでいる④か⑤が正解。

次に、[三つのステップで共通する用語]を探すと、「たけのこ」が1行目「筍（たけのこ）」と⑤「タケノコ」にあるが、④にはない！

④は「豈」の末尾を「んや」の反語で読み、⑤は「なるか」の「なる」が連体形なので、疑問で読んでいる。これは両方ありうる。

⑤の「比ひ（たぐ）」は「比類（比類なき、類（たぐい）まれなる）」という熟語からの読みで、正解である可能性が高い[170]。うーん。④か？⑤か？

ありがたいことに、④「無用のように見えるものこそ役に立つ」も⑤「無用とされるものこそ天寿をまっとうする」も「無用がヨイ」点は同じ。正解は二つにしぼれたし、主張も「筍（たけのこ）…無用がヨイ」とわかった。これで十分。これが大事。ここで最初にもどる。

問1　{注}（1）傍線部の直前で「竹多」く、1～2行目で「春…毎（ごと）に…採食に供し」し、あれこれ料理して[注4]「食卓にならべる[注5]」ので、「筍を食らふを」習慣としている④が正解。

なお②「弊習」は「弊害習慣」で悪い習慣。「悪弊」ともいう。

問2　{漢}{注}{熟}{対比}

「方（まさ）に[158]（ちょうど）」なので②③⑤にしぼる。②の「…なるも、」は「…であるが」という逆接だが、逆接を示す漢字「而（しか）るに[44.6]」などがない。③は「上下」を使って読みが複雑なので確認が大変。そこで簡単そうな⑤で確認する。

「清嗜」は注６「清雅なものへの嗜好」。注６をさらに熟語を使って訳すと「清涼風雅への嗜好」→「風流への愛好」。すると⑤「目するに清嗜を以てし」は「目するに風流への愛好を以てし」→「風流を見るのを愛好し」→「風流を愛し」。

また⑤「方(まさ)に長ずるを斬(と)らず」は「ちょうど成長しようとする○○を取らない」。○○は1行目から「竹」であり、「ちょうど成長しようとする竹」は「筍(たけのこ)」だろう。

ここで傍線とその前を主語述語でまとめると

[主]江南の人　[述]筍(たけのこ)を食べる

[主]好事者　[述]風流を好み　筍(たけのこ)を取らない

傍線の後は、[対比に注意！]すると

故に…甘い(ウマイ)と剪伐　**↑対比↓**　苦い(マズイ)筍ノミ(だけ)完全

となっている。

すると、「江南の人は筍を食べるのでウマイ筍は切るが、好事者は風流を好み筍を取らないので、マズイ筍だけ完全なまま残る」となって論理はピッタシ。正解は⑤。

なお、③「事を好む者清嗜を以て方に長ずるを斬とらずと目す」の訳は「事を好む者は、風流への愛好によって筍を取らないと見る」であって意味不明。

問3〔対比〕

苦い＝マズイ vs 甘い＝ウマイ という対比がわかっていれば、次のように「」内の漢字を拾いながら67行目が読める。

Ⅰ苦いと「棄」てられ、Ⅱ甘いと根こそぎ「取」られるので、Ⅲ甘いと「戕（そこな）」い、Ⅳ苦いと「棄」てられるが「伐（き）」られない。

なお、Ⅰは「苦（にが）きにより棄てらるる」と読む。この「より」は比較44ではなく理由。見たことがないのでⅠは迷ったかもしれないが、ⅡⅢⅣがかんたんで、しかもⅡ甘Ⅲ甘Ⅳ苦の組み合わせは①しかない。

また、Ⅳがわからなかったものは基本的な漢字を問う問4ができなかったはず。

問4〔漢〕

「猶（な）ホ〜ごとシ：まるで〜のようだ」155→「同じような」⑤

解答に1秒以上かかった人は要注意。

問1（2）〔対比〕

６行目の対比では、マズイ苦は「棄」てられ、ウマイ甘は「取」られる。したがって「ウマイのを取る＝ウマイのを尚＝ウマイのを尊重する③」ので、取って食う。ウマイのを④「保全する」まだと取って食べないことになる。

なお、ここでの「尚」は「とうとぶ」と読み、使用例は「尚武（しょうぶ）の気風：武をとうとぶ」などだが、知っている必要はない。

問５〔強〕

「莫不 122」の読みは「～ざるは莫（な）し」なので①か③。問３のＩで、苦は捨てられる。[対比に注意！]すれば

苦＝マズイ＝賤↑対比↓甘＝ウマイ＝貴　となり

苦＝賤なので、苦は捨てられ、賤も棄てられ、正解は「賤は棄てられ」の③。

なお「貴・賤」は「取る・棄つ」の目的語だが、この場合の「貴取」「賤棄」を「貴ヲ取ル・賤ヲ棄ツ」とは読まない。その理由は、「取レ貴（ルヲ）」のようにひっくり返って読む時だけ「ヲ」と読む習慣（読みクセ）があるからだ。

「取る」対象の「貴」が「取る」の前に提示されている時は、「貴」の次に「は」を入れて、「貴ハ取リ、賤ハ棄テ」と読んだり、受け身

にして「貴ハ取ラレ、賤ハ棄テラレ」と訓読する。「は」の前に「を」を追加する時もあるが、"owa"では発音しにくいので"oba"に変わり、「貴ヲバ取リ、賤ヲバ棄テ」と読む。

「読みクセ」については攻略マニュアル m59 で、動詞の前に来る目的語を「〇〇ハ」と読む例については、過去問 2003 年で解説してある。

音読して読み慣れていれば迷うことはない。しかし「目的語は必ずうしろ」という誤った文法に頼るものは①にひっかかる。もちろん漢文（古典中国語）にも詳細な文法があり、その中で、動詞の目的語が動詞の前に来る場合も説明されている。しかしそれは日本の試験では問われない。試験で問われるのは中国語を日本語で読んだ時の「語法」。だから日本語で音読して慣れていれば、早く、正確に解けるのだ。

問7〔対比〕

三つのステップで正解は④か⑤だった。④⑤の「これ」は直前を受けるので、傍線Dの直前を訳して確認すると次のように対比になっている。

X取られる者（甘ウマイたけのこ）が不幸（剪伐 44.4）

Y棄てられる者（苦マズイたけのこ）が幸（完全 44.5）

⑤は次のようにYおよび44.5に対応している。

⑤「Y苦い…無用とされる（Y棄てられる）ものこそ天寿をまっとう（全44.5）する（Y幸い）」

正解は正確な訳から作られるm19　ので、Yを訳した⑤が正解。

一方、④は「無用にみえる（Y棄てられる）ものこそ役に立つ（Y幸い）という考え」が「見失われがち」としている。しかし筆者は、「Y棄てらるる者に幸いなるを知る45.1」と述べ、Yが「見失われがち④」なのではなく、Yを「知る45.1」と明言しているので、筆者の主張と反対。

ヒッカケは　主張をずらして作られるm91

□補足…余裕がない者は読んではいけない。受験知識としては不用。

「豈…耶」の翻訳について

1　⑤は訓読「…なるか」を「…ではなかろうか」と訳しているが、「…なるか」の機械的翻訳は「…なのか」。

2　『ない』の未然形：なかろ」を含む「…ではなかろうか」も「…なのか」もほぼ同じ意味なので、訳としては問題ないが、次のような誤解を招く可能性がある。

3　「～ではない＝～にあらず」なので、「…ではなかろうか」は次のように「…にあらざらんや」の機械的翻訳。

ではなかろ＋う＋か

にあらざら＋ん＋や

そして「…にあらざらんや」の漢文は「豈非…□」。このため原文の「豈…□」と異なる。そこで⑤とは別の訳を検討する。

4　中国語「豈qi」は想定外の事態への驚きを表す語。アレ！と訳してもよい。だから次のように反語・詠嘆・疑問の用法が存在する。

アレ！そんなことあるの？そんなはずはない！反語

アレまあ！なんと…ではないか！詠嘆

アレ！もしかして…なの？疑問

アレ！まさか…なの？疑問

5　「耶：や、か」は疑問。このため「豈…耶」で反語はありえないので、訓読の選択肢としては⑤の「あに…（なる）か」しかない。

6　「なるか」の機械的翻訳「なのか」を生かしつつ、疑問をあらわすため、復習用現代語訳では「もしかしてこれこそ荘子の言う『無用ヲ以テ用ト為ス』ことと同じなのだろうか？」としておく。

問6{漢}{対比}

「夫レ44.7：そもそも…151」のあとには結論がくるので、必ず夫レの前で段落が切れる。そこで正解は①か③。

イの前後は[甘いと…←イ→苦いと…]という単純な反対になっている。

一方、アの前後は「(地域として) 江南では…。/ア/(文化として) 風流人は…」となっている。そこでアに「一方」などの言葉を補って、「地域的に…。一方、文化的に…。」とした方がわかりやすい。

アもイもその前後は対比になっているのだが、アでは関連しない二つの要素を対比し(例：試験に合格するには…。一方、恋というものは…。)、イでは単純に反対の要素を対比している(例：男は優しく、女は強く)。この場合、段落や文を切る可能性はイよりアの方が高い。だから正解は①。

なお、原因・結果で1～5行目を整理すると次のような関係になっている。

原因1　江南では筍を食べる　→結果1　甘い筍は食われる

原因2　風流人は筍を取らない→結果2　苦い筍は残される

右の因果関係を理解しながら学習してもらうため、訓読と訳では別の切り方をしているが、イで段落が切れないことは確実。だから正解①はゆるがない。